

テングカワハギ

Oxymonacanthus longirostris



テングカワハギは見た目の姿も色もユニークなダイバーにも人気の魚だ。暮らしぶりも特徴的で、その細長く伸びた口でサンゴ、特にミドリイシ類のポリプを専食する。そして、たいてい雌雄ペアで行動し、そのペアは一年中なわばりを守るために維持される。なわばりは、エサ場を確保するためのものだ。そして、夜寝ている間になわばりの外に流されてしまわないように背びれの棘と腹びれとを枝状ミドリイシの枝につばって体を固定して眠る。いわばエサと寝床にサンゴを利用するのだ。そのため（特にサンゴを専食するため）サンゴが減るとテングカワハギの数も減ってしまう。1998年の白化の際にも大きな影響を受けたという（小北智之 2010 みどりいし (21): 16-19）。2016年の白化でサンゴが大きな被害を受けた八重山海域のテングカワハギはどうなっただろうか。写真は、阿嘉島臨海研究所が種苗生産して海底に植え付け成長したウスエダミドリイシをなわばりにしているテングカワハギのペアだ。サンゴの人為的な増殖には、こうしたさんご礁生物の維持の意味もある。

撮影：岩尾研二
撮影日：2011年3月6日
場所：マジャノハマ

編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

慶良間諸島国立公園ができてから丸3年が経ちました。昨年2016年は久しぶりに厳しい白化に見舞われ（本誌記事参照のこと）、さんご礁としても国立公園としてもますます保全と管理が大切になります。そのためには、まずは現状を知ることが何よりも大事で、どんな生物がどのような環境のもとで生息しているのか把握する必要があります。サンゴの生息種にしても、今号でもコモンサンゴ類やクサビライシ類の新たな生息が報告されていますので、まだまだ調査・研究の余地は少なくありません。また、昨年の白化では水温や流れなどの環境要素のモニタリングの必要性を、あらためて痛感しました。今号には光環境についての記事も掲載されていますが、同様の観測を定期的にも継続的にもおこなうことができれば、光に大きな影響を受けるさんご礁生物の挙動を理解する上で大きな手がかりになるだろうと思います。今後のさんご礁の保全のために、環境とそこにすむ生物について“知り、守る”体制が整うことを心から願います。



発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

一般財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875

E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>